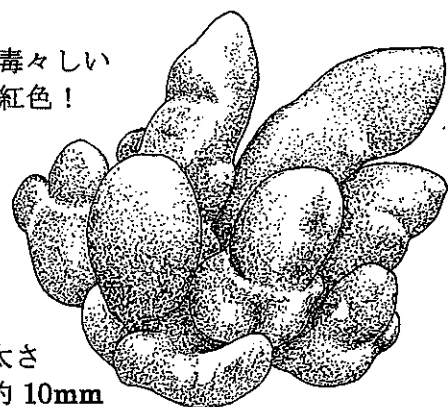


はり ま たん けん 播 磨 探 検

2022. 9. 12 3248

え・文 赤松 弘一

毒々しい
紅色！

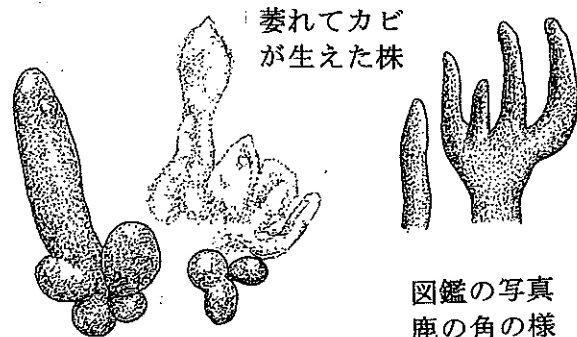


太さ
約 10mm

カエントケ 火焰茸

(ニクザキン科)

学名 *Trichoderma cornu-damae*



萎れてカビ
が生えた株

図鑑の写真
鹿の角の様

別の場所で見つけた株

秋になり気温が下がって降水量が増えると多様なキノコが出現する。9月10日キノコ採集のため、一人の男が加東市の公園を訪れた。白露を過ぎても気温が高い日が続いていたが、イグチの仲間のアマタケやヌメリイグチ、チチアワタケなどの可食のキノコが数

本ずつ採れた。男は2019年の秋にスッポンタケの幼菌を見つけた遊歩道を歩いていたとき、太短い赤サンゴのような物体に出会った。「おっ、これは猛毒のカエントケ！初めて見た！ヨーシ！」男の顔が喜びに輝いた。初めての出会いはうれしいものだ。少し前の新聞に「日本各地に猛毒のカエントケが発生している。要嚴重注意」という記事が出ていたのを思い出した。公園の歩道にも「カエントケ危険！さわるな」の看板があった。

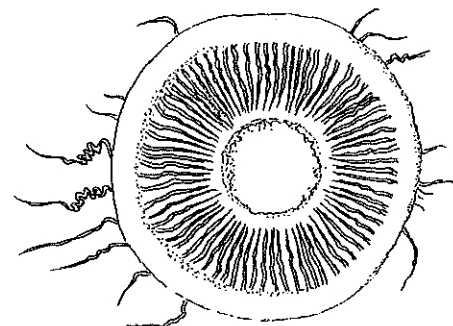
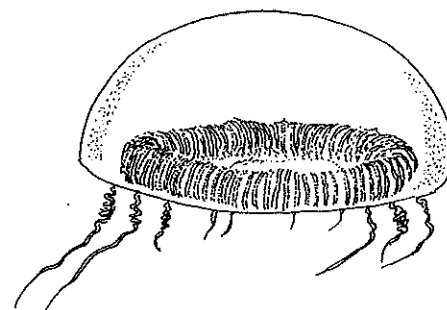
カエントケは非常に毒性が強く、その汁が皮膚に付くだけで激しい炎症を起こすため、触るのも危険だ。食べると嘔吐下痢はもちろん、全身の皮膚がただれ、呼吸障害や脱毛、小脳萎縮などが起こるらしい。致死量は3gほどである。死を免れても後遺症が残るといふ。まさにキングオブ毒キノコだ。英名はPoison fire coral（毒炎珊瑚）である。男が見つけたものは短い棍棒状だが、図鑑には鹿の角の様に枝分かれしているものが載っている。学名の *cornu-damae* は「鹿の角」の意味で、その形からナルホドである。カエントケは水分が少なく、折れた断面は白く緻密で固い、表面だけが赤くここに胞子が付くようだ。

元々稀なキノコなのだが、最近目撃が増えたのには森林や里山で進む「ナラ枯れ」が原因だといわれている。カシノナガキクイムシがシイやカシの木に入り込み病原菌を広げて樹を枯らしてしまうのだ。そしてその朽ちた切り株などを好んでカエントケが発生しているらしい。遊歩道やその周辺にはイノシシが餌をさがして土を掘り返した跡がある。イノシシなどの野生動物はカエントケを食べて中毒することはないのだろうか？

かつてシイやカシの樹は薪炭に利用されていたので巨木になることなく数年で切られ、クイムシが異常繁殖することはなかった。それが利用されず放置されて巨木になりクイムシが繁殖しやすくなったらしい。人が里山を活用し共生していた頃は、ナラ枯れは少なかった。人と里山のつながりが希薄になったことがカエントケの増加につながった。

公園の遊歩道2か所でカエントケを発見したが「触るだけでも危ない！」ということで写真を撮るに留めた。男は採取した可食のキノコを持ち帰り夕飯のみそ汁に入れて食した。男とは私の事です。 念のため。

オワンクラゲは ノーベル賞の輝き ～大塩海岸～

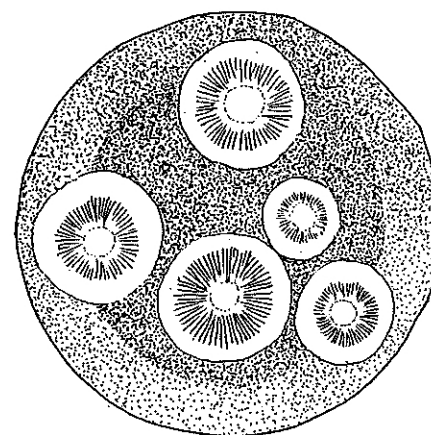


オワンクラゲ 御碗海月

(オワンクラゲ科)

学名 *Aequorea coerulescens*

傘の直径 80 mm



バケツの中に漂う大小5匹

8月末の土曜日に、またしても大塩の海岸にやってきた。秋の気配はまだ感じられず西に傾いた太陽が海面に反射して眩しい。干潮の波打ち際には、至る所に丸く扁平でクズ餅のような物体が落ちていた。ミズクラゲかと思ったが、傘の真ん中に特徴の四つ葉模様が無い。水面に漂っているものを採集しようとして「毒はないのか？」と一瞬不安が頭をよぎったが、「アンドンクラゲ、アカクラゲ、カツオノエボシ以外は大丈夫」と根拠なく決めつけ、素手でつかんで6匹をバケツに入れた。

帰って図鑑で調べると、オワンクラゲであることが分かった。毒はないようだ。姿形からナルホドの名前である。「刺激をくわえると傘の周辺にある生殖腺が発光する」と記されていたので、さっそく部屋の電灯を消して、スケッチ中の個体を棒で刺激してみた。シツコクつくと青白い光が1つ一瞬輝いた。「おお、光った！ようし！」というわけで玄関のバケツの中の残り5匹を容赦なくつついた。ほとんど死にかけていたので期待していなかったが、弱い光が数個瞬いた。学名の *Aequorea* は「海の」、*coerulescens* は「青い」という意味らしい。

このクラゲを調べていて驚くべきことが分かった。2008年に下村 脩博士が受賞したノーベル化学賞にはこのオワンクラゲが大きくかかわっていたのだ。下村博士は「オワンクラゲはなぜ光るのか」を調べるために数十万匹ものクラゲを採集し、そのクラゲの傘縁に紫外線に反応して緑に光る GFP（緑色蛍光たんぱく）という物質を発見した。GFPの遺伝子を細胞の中の観察したいタンパク質に組み込めば、紫外線を当てるだけでたんぱく質の挙動が緑の光となって観察でき、生体の機能を解明できるのだ。「難しくてわからん？」大丈夫、下村博士はわかっています。というわけで、はからずもノーベル賞をもたらしたクラゲを捕獲したのだった。

翌日、スケッチが終わるころにはガラス容器の中でクラゲは分解し始めており、悪臭を発していたので、近所の溝に海水と共に放流した。溝に住み着い

ているモクズガニなどのエサになるだろう。しかし、これを食べてもモクズガニは緑に光らない。それにしてもクラゲのように一部白い模様があるがほぼ透明な生き物を黒インクで描くというのは非常に難しい。私の能力ではかなり無理がある。